

Ⅲ－8 96歳の急性心筋梗塞に対し経皮的冠動脈形成術を行った1例
 ○北山 和敬 小路 祥紘 加藤 千里 阿部 直樹
 (つがる総合病院 循環器呼吸器腎臓内科)

【症例】96歳、女性【現病歴】2017年10月某日朝7時に突然の心窩部痛を自覚し救急要請した。前医にて急性心筋梗塞が疑われ11時5分当院転院搬送となった。【既往歴】95歳、右大腿骨転子部骨折術後【背景】HDS-R 13点、シルバークー歩行可能【現症】身長145cm、体重34kg。意識清明、体温36.5度、血圧132/83mmHg、脈82bpm、SpO2 94% (鼻カスラ 2L/min)、両側肺野に湿性ラ音を聴取する。【入院後経過】心電図ではV1-V5でST上昇、II、III、aVfでST低下を認めた。血液検査では心筋逸脱酵素の上昇、心エコー図で左室前壁の壁運動低下を認め急性心筋梗塞と診断した。緊急で冠動脈造影検査では左冠動脈前行下枝(LAD) #6の100%閉塞、右冠動脈(RCA) #1の90%狭窄を認めた。責任病変はLADと判断し引き続きPCIを施行、TIMI 3で終了した。入院後誤嚥性肺炎、尿路感染症を併発したが抗生剤加療により改善、第22病日にRCAに対するPCI施行した。心臓リハビリテーション継続し、第51病日に以前と同様にシルバークー歩行可能な状態で施設に退院となった。【考察】近年本症例のような高齢者に対するPCIの頻度が増加傾向にある。86歳以上の高齢者であっても長期予後には影響しないものの、PCI成功により院内死亡率が有意に低下することが文献的に報告されている。2016年6月1日～2018年5月1日までに当科に入院した急性心筋梗塞症例は77例であり、そのうち21例が80歳以上の高齢者であった。21例のうち入院中の合併症(死亡、輸血、感染症)は8例に生じていた。18例にPCIが施行されたが、施行群と未施行群では患者背景として年齢(84.5 ± 3.5 vs. 93 ± 3.5 , $p=0.004$)、心筋梗塞or CABGの既往(1 vs. 2, $p=0.002$)、認知症の有無(38.9% vs. 100%, $p=0.049$)、歩行可能の有無(94.4% vs. 33.3%, $p=0.005$)に有意差を認めた。エンドポイントとして施行群と未施行群で総死亡に有意差は認めなかったが、在宅復帰率ではPCI施行群(83.3% vs. 33.3%, $p=0.059$)で多い傾向にあった。今後も高齢者の心筋梗塞症例が増えることが予想されるが、入院中の合併症の頻度が多いものの、PCI施行により在宅への復帰率が高い傾向にある現状を踏まえ、今後も加療を行っていく必要がある。